

テクリと起上つた、面白がつて、大勢のお多福共が、彼所からも此所からも『達磨大將ねても起る!! 達磨大將ねても起る!!』とコロ／＼轉がし廻はしました。何んば達磨でもかうなつちや、氣が氣じやない、コロ／＼コロ／＼、も一熱くなつた、目が眩む様になつた、到底も堪らんから、マ、ヨ大暴れに暴れ散らしてやらんと、今度は自分からコロ／＼と轉がり、ぶつかり次第にお多福共をぶつたをしてやつた根が温和いお多福共ですから、ア、怖い／＼と寝たり起きたり大騒ぎ、がら／＼と室内へ逃込んだ。達磨も先きから意地目られ、逃場を失つて、困り居るのであつたから、これは幸ひと、クリ／＼と轉がりながら、自分の家へ還つてしまひました。

(まだあります)

音 樂 會

そ の 子

(一) 美しいちゃんのお家

東京の山の手、小石川の或町の裏長屋に今年十二になる、美しいちゃんといふ女の子が、去年の暮に、お父つあんを亡して、今年の暮にはまた、お母さんが病氣で寝んで居るといふ不仕合はせ、もうお正月が三日か四日したら來るといつて他の子供等は美しい衣物を買つてもらつたり、其上に羽根だの毬だのといつて、大騒ぎをして居るのに、今日も美しいちゃんは朝から晩まで、お母さんの枕元に座つて、始終お母さんの脊中を撫で、は、時々口の中で何か低い聲で唱つて居るのであります、臺所には、御飯もありません、そして可愛相に、美しいちゃんは、朝からまだ何も食べないので

すから、前からもうお腹が空いて堪りませんけれども、仕方がないから、低い聲で、唱歌を唱つて、氣をひきたて、居るのです。夫でも、時には、ひもじいことや、寂しいことなどを考へ出して、又病氣で眠つてるお母さんの顔をのぞいては、そつと涙を拭いて居ます、それは、今のお母さんのお口に合ふものといつては、林檎より他にないので、どうか美しい大きな林檎をと思つて居るのですが、今日の處では、夫を買ふお錢といつては一錢もないからであります。

然し、此美しいちゃんは音楽が大好きで、又生れ付き不思議なほど音楽がよく出来た。で、前から小聲で歌つて居ましたのは、いつか、自分で歌を作つて譜に合はせたのであります。

で、美しいちゃんは、大分勞れたもんですから、一

寸の間休まうと思つて、窓を開けて、外を通る人を眺めて居ますと、蝦茶の袴をつけた二人の女學校の生徒が話しながら前を通つて行きます、美しいちゃんは何の氣なしに、其話を聞くと、明日の午前、上野の音楽學校で、慈善音楽會があつて名高い、毬子嬢の獨唱があるといふ話し。

「ちよいと、あの先生所まで行けるといふのだが」と、何かしら美しいちゃんは、獨りで考へました。そして、少しの間、じつと、兩手を膝の上に置いて考へて居ましたが、やがて、何か思ひ付いたと見えて、兩方の眼が、新しい希望の光で輝いて來ました。そして、ついと立つて、二疊の間に行つて、小さい鏡臺から櫛を取り出して、忙はしく髪をときつけて、夫から、小さい手箱の蓋を明けて、何かしらん字の書いた汚れた紙片を取り出し

ましたが、やがて、すやく／＼眠つてゐるお母さんの顔を、じつと見つめて、そして、そつと、裏口から走つて出て行きました。

(二) 毬子さんの家

こゝは、本郷駒込西片町の奇麗な家の二階の一室です。名高い音楽家の毬子嬢は、女中に向つて

「もう、私、今晚は大變に疲れて居るのだがねー一體私に會ひたいつてのは、誰だといふの」

「あの、お嬢様、ほんとに、可愛い、小さな娘の子でございませすの、そして、ほんのチツトの間先生にお目にかゝりたいつて申して居るのですよ」

「そう、そんならいゝわ、よんで来ておくれ、私子供なら大好きだから」

「じゃ、つれて参ります」

といつて、女中は下へ行きましたが、やがて、可

愛い、美いちやんが、女中に案内せられて、恐る／＼這入つて來ました。年よりはまことに大人びて居て丁寧にお辭儀をして申しますには、

「あの、夜分上りまして失禮とは存じましたが、おつ母さんが病氣ですし、夫に、お薬も、お米も頂くお錢がございませんもんですから……………、少し先生にお願ひ申したいと思つて、明日の音楽會で、こんなつまらないんですが、先生に之を歌つて頂いて、夫で、いくらでも、お錢を頂くことが出來たら、夫で、おつ母さんに、薬もお米も上げることが出來様かと思ひまして、夫で、参つたのですが……………」

といつて、小さな紙片を帯の間から出しますと、先生は、にこやかに

「どれ、お見せ」といつて取つて見て、一寸口の

中なかでかろく歌うたつて見て、

「まあ、此譜このよは、汝おなたれ作りになつたのですつて——

夫それに歌うたまで、まあ、どうして、こんなによく出来たのでせう？」

といつて、一寸考ちよつとかんがへて見て、

「あの、明日めようの音楽會おんがくかいへ汝おなたれ入らつしやいな、え、來られますか。

「はわ、參まゐりますとも」といつて、美みいちやんの顔かほは見てる中に喜よろこで輝かがやき渡わたりました。

「けども、病氣びやうきのおつ母かさんを一人ひとりぼつちにして行く譯わけには參まゐりませんから。

「夫それは、私わたしの方ほうから誰だれか女中にようぢゆうを一人ひとりやつて、御介ごかい抱ほうさせる事ことにしますから、夫それなら、來ても宜いでしよ——、さ、こゝに、入場券にじやうけんが一枚いっまいあります、之これを持もつて入いらつしやると這入はいれれますから、きつと私わたし

の側そばへお出いででなさいな、そして、之これは、僅わずかですが、今晚こんばんお歸かへりがけに、お藥くすりと他に何かなに甘いもので買かつて行いつてお上あげなさいな」

美みいちやんは、こんなに優やさしくせられて、それに、お金かねまでも頂いたてて夢ゆめでないか知らんと思おもつた位くらいでした。夫それで、毬まり子こさんに、御邊ごまへをして、途中で、お藥くすりと夫それから、大きな林檎りんごを澤山たくさん買かつて、大おほ急いそぎで、家うちへ歸かへつて、おつ母かさんに、此このお話をはなしました。聞きいて居ゐるおつ母かさんは嬉うれしくつて涙なみだをこぼしますと、お話をはなする美みいちやんの睫毛まつげにも、小こさい涙なみだの露つゆがとまつて居ゐります。此この晚ばん、美みいちやんは、なんだか胸むねがどきどきして、大おほ方かた眠ねらずに明あかりました。

(三) 音樂會

翌あつる日ひの朝あさ。美みいちやんは、早はやくから起おきてそ

こいらを片付けて、すぐ上野の音楽學校へ出かけました。そして、奏樂堂へ這入りますと、まわ、其立派なこと。もう時間が来たのだと見えて、奏樂堂は人で一杯です。其中には、奇麗な帽子を被つて、胸や腕に立派な寶石の光つて居る衣服を着た西洋婦人も居れば、美しくお飾りをしたお嬢さん達も澤山居る、夫に眞正面には、何某の宮様の御息所もお出になつて居る様子、美いちやんは、こんな立派の所へ来たのは生れて初めてだと思ひました。

そうこうしてる中に、會が始まつて、ピアノの獨奏だの、ヴィオリンの合奏だの、オルケストラだの、いろ／＼面白いのが出ます。音楽好きの美いちやんは、丸で天國にでも来た様に思つて、うつとりと聞き惚れて居ます。やがて、順序書きの

通りに進んで行くと、さあ毬子さんが出て来ました。すらすらとした美しい洋服姿、神々しい程奇麗なお顔、本郷のお家、夜前お目にかゝつた時間もまわ、奇麗な方と思つたが、こゝでお目にかゝると、一層美しくお見えになると思つて、美いちやんは、側目もふらないで一生懸命に守つて居ります、夫にしても、私のこしらえた、あんなつまらない唱歌を、この神様見たいな方が、まわ眞眞に歌つて下さるのでしようかと思つて美いちやんは息もつかないで待つて居ますと、毬子さんの後で、合奏が始まりました、低い悲しい様な曲の合奏、美いちやんは、夫を知つて居ますから、一寸聞いたばかりで、「ハッ」と思つて、嬉しさに兩手を叩きました。すると、毬子さんは彼の唱歌を歌ひ始めました。そして美しく澄み渡つた聲で、悲

しい様な、人の氣を沈ませる様な、この唱歌を歌ひ出したもんですから、聞いて居る人の眼には、皆一様に涙を浮めた位、そして又、其歌の詞といつたら、どうして、こんなに優しく可愛く出来たらうと思はれた位。

(四) おしまひ

美いちちゃんは、丸で空を飛んで居る様な心地で家へ歸りました。もう、お鏡所じやない。日本で一人といふ音楽家に、自分のこしらへた唱歌を歌つて貰つて、そして何千人といふ聴手が、夫を聞いて皆泣いたのですもの。

其夕方、美いちちゃんは、毬子さんが、尋ねて見えられたので、又吃驚しました。「まわ、こんなに汚い家へ」と思つてると、毬子さんは構はずさなく上つて来て、美いちちゃんの美しい前髪を撫で

ながら、病氣のおつ母さんに向つて、

二十八

「始めまして、あの私は毬でございますが、御嬢さんのお手柄で、大變なお金が、あなたのお手に這入ることになりました、今朝の慈善音楽會で二千圓のお金が集まりましたが、其中、五百圓は、不仕合なあなた方母子さんに上げ様といふことになつたのと、夫から、美ちゃんの唱歌を、或本屋で出版したいといつて、二百圓のお金を持つて来ました。夫で、さし急いで今晩上りました譯で、さ、美いちちゃん、お金を皆こゝに置きますよ、そしておつ母さん、これで貴母のお病氣も、今によくならましよう、これも、皆美いちちゃんのお孝行の蔭で、全く神様から下すつたのだと思ひます」。

おつ母さんも美いちちゃんも、之を聞いて、もう嬉しいやら、有りがたいやらで、お禮もいふこと

が出来ないで、たゞ泣いて居りますと毬子さんも一所になつて泣いて居ります。

夫から、間もなくおつ母さんの病氣も直れば、毬子さんのお蔭で、大したお金が出来たので、美いちちゃん母子は、楽しいお正月を迎へたといふお話し（めでたし〜）

系
繪ときの答（前號）

(一)が電氣燈を下から見た所(二)が自轉車に乗つて行く所を後から見た所(三)が鐘を撞木の方から眞直に見た所(四)が水の中に小石を投げ入れた所(五)は車井戸を井の底から見た所だといふこと。

以上、皆あてた方は、神田の小倉とし子さんといふ方、お約束の通り、美しい繪はがきを十枚上げました。

